徳島新聞　2011年1月3日　朝刊

阿波中世史 こぼれ話 ▶▷10◁◀

県立博物館学芸員 長谷川 賢二

大般若経が語る讃岐との交流㊦

吉野川北岸の僧ら書写

板西庄の宥真 中心的存在

今回は、東かがわ市与田山にある若王寺の大般若経を取り上げ、阿波と讃岐の交流を紹介しよう。

若王寺は現在、真言宗寺院で、隣には与田神社がある。明治初年の神仏分離まで、これら寺社は一体であり、若王子、若一王子大権現などと称した。この名称から、熊野十二所権現の一つである若王子を祀る熊野信仰の拠点だったとみてよかろう。

若王寺所蔵大般若経はすべて折本に仕立てられ、重複を含む602巻が現存する。もとは応永6～9（1399～1402）年に書写されたもので、近世から今日まで、数回の補修や欠巻の補充がなされてきた。写経日・写経者などを記録した奥書を伴うものが542巻もあるので、史料的価値が高い。

この大般若経の書写は、讃岐在住の僧を中心として行われたが、越後や若狭、摂津、播磨、阿波、薩摩といった各地からの参加があり、広域的な交流に支えられていたことが特徴的である。

阿波からの参加は、萱嶋庄（徳島市）、板西庄および板西下庄（板野郡）、秋月庄（阿波市）といった、阿波北東部の吉野川北岸地域の僧を中心とした。

なお、讃岐出身で、若王寺の大般若経書写にもかかわった増範は、応永19（1412）年、京都・北野社の一切経書写を主導した。これには秋月庄の僧が参加しており、若王寺の大般若経との関連が考えられる。

大般若経を伝えている若王寺＝東かがわ市与田山

ところで、阿波の関係者のうち、板西庄の僧である宥真は42巻分を書写しており、個人別の写経量では第2位という多さである。したがって、彼は写経事業において中心的な存在だったと思われる。

彼の立場については、115巻の奥書からうかがえる。「老僧」の意向に背き難いため、悪筆であるが写経を行ったと記されている。「老僧」とは、274巻に「大願主真海　執筆宥真」とあることから、写経の願主である真海を指すものと考えられる。写経が始まった応永6年、真海はすでに69歳で、まさに「老僧」であった。

この真海は、28巻などによれば「入野山住侶」だった。入野山は東かがわ市内の地名で、若王寺に近い場所である。どのような事情によって宥真が真海と結びついたのかは分からないが、師弟関係にあったのだろう。宥真が阿讃国境を越えた交流の中で生活していたことが知られよう。

宥真の信仰についてもみておこう。156巻に「南無十六善神、南丹生高野大明神、南無大師遍照金剛」とあり、228巻には「南無熊野三所権現」と記していることから、弘法大師信仰と熊野信仰を核としていたと思われる。また、真言密教の流派である小野流を相承していたらしい（321巻）。このような信仰の在り方は、真海をはじめ、関係者に共通したものかもしれない。写経事業における信仰面での基盤が垣間みられるともいえよう。